今、建築の対象となる各業界では何が課題で、どんな「設計」が求められているのか。フリーランスライター上田隆が突撃取材。

「就活・転職」のトピック5

建築設計者は、これからずっと「売り手市場」

納見健悟 | フリーランチ代表

トピック1 「売り手市場」だが、建築学生は設計事務所を目指さない

ここ最近、建築学科学生の就活状況は、どのようなものか?

建築設計者を専門とする人材支援事業の現場から見えてくることを、フリーランチ代表の納見健悟さんに聞いた。

「東京オリンピックが決定した2013年からは、完全に売り手市場に。設計事務所はじめ建築業界では、今、どこも人を増やそうとしています。私自身は2000年代初頭の就職氷河期時代に遭遇し苦労しましたが、現在の建築学生はそれとは反対の『選べる時代』にいます」。

しかし、さまざまに悩みを抱えているという。

「彼らは、この景気が永続的に続かないことを理解しています。情報収集の過程で、OB/OGから建築業界の先行きの厳しさを聞いているからです。その上で、『設計事務所やゼネコンには行けるが、本当に進むべき道なのか? もう少し将来性のあるビジネスはないか?』と、私に質問するわけです。つまり建築設計単体では、なかなか食べていけないということが、建築学生のコモンセンスになっています」。

今、建築学生が魅力を感じている仕事とは?

「昔に比べ、過酷な労働条件が知れ渡り、若手のロールモデルもないため、アトリエ設計事務所への志望者は少なくなっています。今、建築学生が憧れている会社は、建築学科出身者らが立ち上げた『ツクルバ』や『リライト』など。ここでは、建築設計の能力を使いながら、企画や運営などの周辺領域まで手を広げて『建築』にかかわっています」。

トピック2 就活・転職に失敗したら派遣会社に登録すべし。正社員の道も開ける

納見さんは、就活に失敗した学生には、派遣会社で働くという選択肢もあるという。

「製造業での偽装請負問題のように派遣会社に対して社会的にネガティブなイメージが先行していますが、建築のような専門職の派遣は別物です。良い派遣会社を選べば、2〜3年で派遣先の会社の正社員になれることも多いのです」。

具体事例を挙げてもらった。

「ある構造系の学生Aさんをサポートしたのですが、彼はアトリエ事務所に就職したものの能力的に限界があり3カ月ほどで退社。月給6万円でした。そこで、派遣会社に登録し、施工図を描く仕事を選択するようアドバイス。時給1,400円で残業代も出るので、月25万円を超えることも。現場事務所にいれば建物ができる成り立ちもある程度理解できるようになる。経験を積み、2年後には正社員になりました。現在20代中盤で年収400万円超と、暮らしも安定。

大手デベロッパーの企画部門で派遣社員として働くBさんのケースも成功例です。彼はアトリエ設計事務所で働き体を壊し、鬱の症状もでていました。相談を受けて派遣を提案した当初は、『一級建築士で正社員だったのに?!』という反応。いざ派遣されると、その会社はBさんに会議への参加を認め、物件を担当させるなど『派遣扱い』はしません。『建築のスキルを持った人』という前提で接してくれるそうです。正社員への登用実績も多いんです」。

就活・転職において、派遣はまさに「使いよう」である。

トピック3 アトリエ設計事務所からの転職は苦戦。設備設計者は引く手あまた

建築設計者の転職状況は、どのようなものか?

まずは、組織設計事務所からの転職の場合。

「発注者側、PMやCMの希望者が多いですね。キャリアとしては、川上志向です。

組織設計事務所に勤めた設計者の最大のスキルは、クライアントワークができること。法人相手の与条件整理に長けているのです。担当者とその先にいる上長や役員の意向を忖度しながら、文書や設計図を含めて計画をまとめるわ

現在、景気が安定し、建築業界は人材不足。
就活において建築系学生は、就職先を選ぶ立場に。
スキルのある建築設計者は、まさに引っ張りだこだ。
しかし人口減で建築は余り、どんどん建てられる時代はもう来ない。
「建築設計」は、はたして未来のある仕事なのか。
業界初で建築・不動産企業に特化した総合人材支援事業を展開する
納見健悟さんに、就活・転職の現場からの意見を聞いた。

聞き手＝上田隆｜フリーランスライター

フリーランチがプロデュースしたクレドカードとハンドブックを掲げる設計事務所所員と納見さん（前列右から3人目）　写真提供｜フリーランチ

のうみ・けんご｜1977年埼玉県生まれ。
神戸大学大学院修了。
大手設計事務所、ゼネコン系のマネジメント会社を経て、
2014年、働き方とマーケティングの会社フリーランチを創業。
一級建築士、日本CM協会認定コンストラクションマネージャー、
米国PMI認定PMP。
建築・建設・不動産業界の多様な働き方を応援するメディア「フリーランチ流仕事術」にて、働き方のノウハウを公開中。
http://freelanch.jp/

うえだ・たかし｜1968年大阪府生まれ。
1992年大阪芸術大学芸術学部映像学科卒業。
雑誌編集者を経て、2010年よりフリーランスライターとして活動

けです。ただ、このスキルが評価されるべきものであることを自覚する設計者は少ないですね。私たちはそういった設計周辺スキルを職務経歴書に落とし込み、採用担当者に伝える支援をしています」。

アトリエ設計事務所からの転職の場合。

「転職には大変苦労されています。特に数人の事務所に5年10年と長く勤務しすぎるのは良くない。小さい住宅や店舗の内装などが主体のキャリアだと、社会経験の幅が狭くなり、対人関係のスキルが蓄積されにくいからです。また、独立するにしても、マーケティング・集客や業務の効率化などの稼ぐためのノウハウが身についていないので、成功が難しい」。

求人において、これまでにない動きもある。

「最近、ゼネコンの設計部が、中途採用の求人をしています。2014年に『公共工事の品質確保の促進に関する法律』が多様な発注方法を認めるとし、公共工事において設計施工分離だけでなく、デザインビルドも採用できることになりました。そこで設計者を動員しようとする動きがあるわけです」。

ニーズが集中的に高まる設計者枠が存在する。

「設備設計者はモテモテです。人材不足は深刻で、どこの設計事務所もその確保に懸命です。こうした事態が生じた原因には、建設需要が上がっていること、また改修リノベーションや維持管理などの仕事が増えたことがあります。非常にニーズがあるので意匠設計から設備設計に転身する設計者もいます。

フリーランチでは、企業を支援して設計の経験者である女性がパートタイムで週に2、3日働けるノウハウを提供したり、リモートワーク（オフィスに通勤せず、自宅やコワーキングスペースなど自分の都合の良い場所で仕事すること）できるように支援しています」。

ちなみに納見さんは、パートという働き方を積極的に支援している。

「今まで、設計事務所を辞めれば、時給1,000円のアルバイトのような仕事しかありませんでした。しかし、人材不足にあえぐ設計事務所やデベロッパーなどでは、有資格で実務経験がある設計者は大歓迎。そこで私たちは、『日当2～3.5万円』を標準額と設定し、設計者を紹介していますが、企業側も十分ペイできる額です。例えば、週3日相当で月収36万円、リモートワークも認められる仕事もあり、両者がウィンウィンの関係に。建築業界全体として、担い手不足の問題に対して柔軟な働き方を取り入れる時期にきているのです。

一方で、パートの設計者は正社員とは違って、高い付加価値をつくり出す成果主義に、マインドをチェンジしなければなりません」。

トピック4　採用率アップを目指すなら、建築業界に強い人材会社を使い、自社サイトに「月20万円以上」と記す

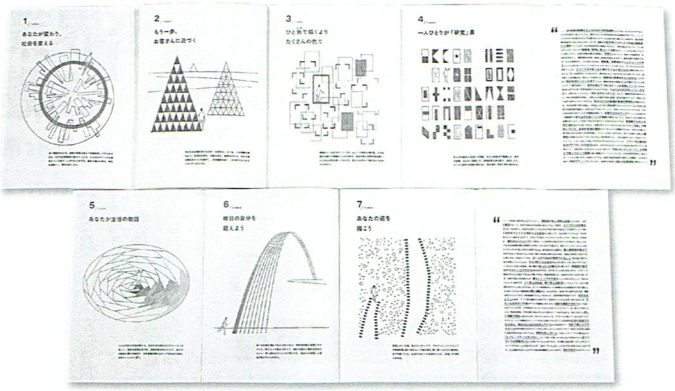
設計事務所側は、採用に対し、どんな対策を取り、何を考慮すればよいのか？

「設計事務所は、自社のホームページで人材募集するのが慣例になっていましたが、自社採用は苦戦していると聞きます。ウェブサイトにきちんと情報を入れておらず、仕事内容すらよく分からない。待遇も明記していないので、アンマッチも多い。少なくとも20万円以上の給与があり、社会保険を完備しているなど、法的にも当然の事柄が書かれた設計事務所には、ちゃんと応募者は来るわけです」。

今や人材紹介会社や求人広告には、能動的な採用戦略がかかせなくなっている。ただ、大手人材紹介会社には問題もあると指摘する。

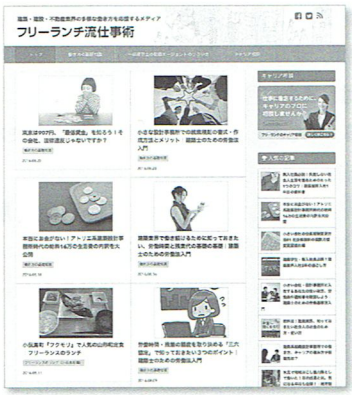
「大手の若手転職エージェントの業務理解度の低さが深刻化しています。大手は分業制なので、採用側の企業を回る営業と、働き手の面談をするキャリアカウンセラーの分業制を敷いています。キャリアカウンセラーは、生情報に触れる機会が少ないので、適切なアドバイスができていません。

設計者の能力は、建築用途や構造、そして企画・設計・監理などの得意とするフェーズから見極められなくてはいけません。それが巷の人材会社では配慮されていない。景気はいいので転職自体はできるのですが、働き手を安売りす



『INAクレド 7 colors』
プロデュース・編集：フリーランチ　発行：INA新建築研究所 クレド策定委員会

ある準大手設計事務所の働き方改革の一貫で
クレド（社員の行動指針）の策定を支援。フリーランチは、
年齢・部署など属性の異なる社員へのヒアリングとワークショップを実施。
社員の業務での体験を元にした、「使われるクレド」をプロデュース。
写真は、クレドの成り立ちを解説したハンドブック



働き方のメディア『フリーランチ流仕事術』
メディア運営・編集：フリーランチ

建築・不動産業界の多様な働き方を応援するメディア。
正社員、派遣社員、フリーランス、独立・開業など、多様な働き方を実現する
ノウハウや事例を発信。主な連載に「建築士のための労働法入門」
「一級建築士の転職エージェントのつぶやき」などがある。
同サイトでは、転職を前提としないキャリア相談も受けつけている

るような不幸なマッチングが増えているのです」。

こうした状況に目をつけ、納見さんは、自身の業界経験を生かし、建築・不動産業界に特化した転職のあっせんを前提としないキャリア相談サービスを開始。相談メンバーは、一級建築士もしくは業界の実務経験を持つ者で固める。相談者からのヒアリングを元に職務経歴書を全面的に改訂するなど、相談者のスキルを整理し「売り」を強調している。

「職務経歴書を見なおせば、年収は50～100万円は変わる」と納見さんは指摘する。さらにフリーランチは、相談に来た人の適正に合わせて、その人を設計事務所や会社に「営業して売り込む」というスタイルで、マッチング率は、なんと6～7割になるという。

トピック 5 「経営者」か「技術者」かを選択し、スキルを積めば、一生食べていける

建築学科学生に、就活へのアドバイスを。

「私がよく学生に言うのは、今の言葉で言うなら『面白いこと』を目指すか、または『技術者』になるのか、はっきり決めておこうということです。

かつて前者の人は、建築家を志望し、アトリエ設計事務所に入所していました。しかし、建築家が作品をつくって世間が注目し、新たな仕事につながっていくというサイクルは、もう主流ではありません。現在、建築家的な創意は、建築とからめた企画系に求められています。そこではマーケティングやビジネスモデルを構築するスキルが必要となります。東京R不動産の馬場正尊さんが先行事例と言えますが、建築学科を出ていてもアトリエ事務所以外で経験を積み独立しているケースも多い。今の時代をリードする『経営者』は、多様な経歴の中から自身のスタイルを確立しています。

後者の『技術者』になるなら、組織設計事務所、ゼネコンの設計や施工管理を通じて、なるべく規模の大きい物件に係わることです。経験を重ねるほどに設計者としての価値が上がり、求められる人材に。組織設計事務所に勤める20代の設計者は、大抵2～3年で辞めたいと思っていますが焦りすぎです。5年以上は勤め、経験を積んだ方が自分の価値が上がるからです」。

新たな仕事を選択する際は、働き方にも気を配るべきだとする。

「設計事務所と設計者のライフサイクルは違います。2020年以降に設計事務所の経営が傾いたとしても、需要の低下よりも高齢化した技術者がいなくなるペースが早いため、設計者には活躍の場があります」。

建築設計という仕事に、未来はあるか？

「役割は変わるかもしれませんが、建物を維持していくためには『設計者』は必要です。今後、人口減で需要は減りつつも、設計者の絶対数は減るので、ますます社会から必要とされるでしょう。

キャリアを育てるためには、『仕事（スキル）』『お金』『健康』『家・家族』という4つの軸を思い描き、それぞれ合格点が取れるようにすることが大事です。2つ以上が回らなくなると、持続的に働くことができなくなってしまいます。ほかの業界では、『35歳が転職の限界』と言われていますが、設計や施工のコアスキルを育てた人は一生働けます。60歳70歳でもまだまだ転職できるのです」。

これから建築を目指す人、道に迷う人にとっては、背中を強く押してくれる言葉だ。